



愛隣幼稚園.....

園だより

.....16. 5月号

子どもたちの声が聞こえる

入園式から2週間が過ぎました。登園時にたんぼ組から聞こえてくる大きな泣き声も最初の何日かだけで、あっという間にいつもの登園風景になってしまったような感じです。ばら組になったH君のお母さんが「まだ始まったばかりなのに、静かでなんだか寂しい。」と言っていました。3人の男の子のお母さんでH君は末っ子です。ご家庭でも幼稚園でも子どもたちとの生活が長いお母さんですから、春なのに静かな幼稚園は物足りないと感じてくださっています。何年か幼稚園に通ったお母さんたちも、春の泣き声にはにこにこ顔の反応です。「笑っちゃってごめんね。」「春ですね。」そんな反応が大半です。対照的に、初めてのお子さんの幼稚園生活が始まったばかりのお家の方には、「おかあさ〜ん」という泣き声は心に刺さってしまうようです。それはそれは切ないことで、心配が膨らんでしまったりもすることでしょう。同じ春の風景も見方・感じ方が違えば全く違った印象になります。

〈保育園の建設計画が近隣住民の反対で中止に〉最近、こんなニュースがありました。反対理由の一つに「子どもたちの声がうるさい」ということが報じられていました。少し前にも“子どもの声は騒音か”ということが話題になり、東京都では子どもの声を騒音の規制数値から除外するという条例が施行されました。「子どもたちの声がうるさい」とは困ったことです。愛隣幼稚園も子どもたちの生活の場ですから、決して他人事ではありません。小さな子どもたちのいるご家庭も同じことでしょう。笑い声、泣き声、嬉しいことおもしろいことを仲間同士で共感しあう声、怒りを表す声、子どもたちは様々に声や言葉を発しています。その声に自分の心（感情）をのせて周囲の大人や仲間たちに届けています。心の動きが大きく伝えたい気持ちが強ければその声は大きくもなります。実は大人もそれは同じことなのですが、場をわきまえ、声の大きさをコントロールすることもできるので、「大人の声がうるさい」ということはあまり起こりません。（あ、すみません。愛隣の先生たちは時々うるさいと怒られます。）併せて、大人になると声に表すほど心が動く出来事にもそうそう出会わなくなっています。しかし声や言葉は私たちの大切なコミュニケーションツールです。感情表出のための手段でもあります。子どもたちは声や言葉をやり取りしながら心を通わせ集団を形成していきます。声や言葉で心を表現しながら自身の感性を豊かにしていきます。子どもたちの声が賑やかに聞こえているということは、そこに子どもたちの生き生きとした生活や健全な成長が保障されているということでもあるはずなのです。

日本の社会は核家族化が進み、子どもの数も減りました。成人以降、子どもと一緒に過ごす機会は減り、あったとしてもその時間は短くなりました。子どもがいる生活に馴染めなかったり、子どもがいる生活から遠ざかってしまった大人が多くなりました。それで「子どもたちの声がうるさい」と感じる大人が多くなっているのかもしれない。これでは子育て真っ最中のご家庭は肩身が狭くなります。子育てを楽しむことも難しくなってしまうでしょう。子どもたちは大切な社会の一員です。小さいから幼いからと蔑ろないがしろにされてはならないのです。子どもが子どもらしく生きることは尊重されるべきです。子どもたちがのびのびと自己表現する姿に喜びや希望を見出し、その幸せを共有する大人たちの眼差しの中でこそ、子どもたちは安心して、安定した自我を形成することができるということを、私たちはもう一度確認し合わなければなりません。

10日前、熊本を中心に大きな地震が起きてしまいました。多くの方々が避難生活を強いられています。5年前を思い出し、心が痛みます。そんな避難所生活を送る子どもたちのためにセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが「こどもひろば」を開設しました。子どもたちに“遊び場”を提供してくれました。子どもたちはきつと誰に遠慮することなく体を動かし、声を出して笑い合えたことでしょう。どんな時にも子どもたちにはそれが保証されなければならないのです。大人はその声を笑顔を喜ぶ者でありたいと思います。